山形県尾花沢市埋蔵文化財調査報告書第６集

K－610

延沢城跡発掘調査報告書

－ 第１次調査 －

2007.3

尾花沢市教育委員会

例　言

1. 本書は、山形県尾花沢市大字延沢地内に所在する国史跡延沢銀山遺跡（延沢城跡）の発掘調査報告書である。調査費は国庫補助金を受けた。
2. 調査要項は下記のとおりである。

調　査　期　間　　平成18年８月28日～９月24日
調　査　面　積　　約98㎡
調　査　主　体　　尾花沢市教育委員会
調 査 委 員 会　　仲野　浩（元文化庁主任調査官）　　藤木久志（立教大学名誉教授）
田中哲雄（東北芸術工科大学教授）　　保角里志（日本考古学協会員）
角屋由美子（上杉博物館主任学芸員）
事　務　局　　教育長　　鈴木　忠　　社会教育課長　小松良雄
補佐兼文化財係長（調査員）　大類　誠　　文化財係　　椿井達也
発掘作業従事者　　有路秀男　大沼辰治　高橋一夫　鈴木理矩治郎　齋藤英夫
整理作業従事者　　河村由香里　永沢多恵子

3. 本書の執筆と編集は大類誠が担当した。
4. 発掘調査及び報告書作成にご協力・ご指導いただいた方及び機関は下記のとおりである。ここに記して感謝申し上げる。（順不同・敬称略）

横山光弘・常盤中学校・教育やまがた振興課文化財保護室・延沢城跡保存会・尾花沢市文化財保護委員会

5. 調査に関する写真・図面及び出土品は、尾花沢市教育委員会が一括保管している。

凡　例

1. 本書で使用した遺構・遺物の分類は下記のとおりである。

ＳＢ－掘立柱建物跡　ＥＢ－遺構内柱跡　ＳＰ－小穴　ＳＤ－溝跡
ＳＸ－性格不明遺構　ＲＰ－土器・陶磁器　ＲＱ－石製品　ＲＭ－金属品　ＲＴ－陶磁器

2. 遺構配置図の縮尺は図に示した。遺物実測図は２分の１の縮尺とし、遺物分布状況図・図版は任意とした。

目　次

Ⅰ　調査の経緯……1
Ⅱ　遺跡の立地と環境……3
Ⅲ　検出された遺構……3
Ⅳ　出土遺物……6
Ⅴ　まとめ……7

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過

昭和60年12月21日、①銀山廃坑を中心とする東山地区、②山神神社地区、③野辺沢氏の居城とされる延沢城跡の3箇所が延沢銀山遺跡として史跡に指定された。その後、平成元年に『史跡延沢銀山遺跡保存管理計画書』が刊行され、延沢銀山遺跡の保存・管理・整備・活用について、今後の方針が打ち出された。

しかし、この計画書は銀山廃坑が中心で、延沢城跡の保存・管理・整備・活用については若干触れる程度であった。国史跡指定20年を迎えるにあたり、より充実した延沢城跡の保存管理計画を求める機運が高まった。そこで、延沢城跡保存管理策定委員会を設置し、平成15～17年度の3ヵ年にわたり、延沢城跡の保存管理計画書を作成した。

策定委員会では、自然・歴史的景観の実態、延沢城跡の縄張図、延沢城及び野辺沢氏に係わる文献、延沢城下の町割、石造文化財等々の基本調査を実施し、今後、保存・管理・整備・活用をどのように進めていくか論議され、その方針が打ち出された。今回の発掘調査も保存・管理・整備・活用を踏まえた上で実施する。

延沢城跡にどんな建物があったのか、それを知るような具体的な資料は非常に少ないが、保科家が記した『家世実記』(寛文13年）に、改易後15年ちかく経った城跡の荒廃した様子を次のように記している。「延沢御城は誰方より受取候哉不明、（中略）延沢御城之儀何成共道具無之、本丸屋形殊之外損シ、雨不洩座敷一ヶ所も無之、障子戸も直成所不相見、書院と見へ候処ニは畳有之、其外は古薄縁を敷、二ノ丸二有之候四軒敷物も無之、（以下略)」、主を失った城跡の無残な情景である。記述から読み取ることができるのは、書院造りの建物を含む館が本丸に存在したことである。

また、市所蔵の絵図面『羽州野邊沢霧山之城』に、「二重ノ矢倉」と「ムマヤ」と称する白亜の2棟の建物が本丸周辺に描かれている。さらに、『延澤軍記』(龍護寺本）には「本丸ハ長サ百間二、幅八拾間二餘リ、臺所ハ一段下テ幅七間、長サ三拾間、築地塀・櫓四方二構、大門二ヶ所、塀地門二ヶ所、其外門戸八ヶ所有、（以下略)」などと記され、様々な施設があったようである。しかし、これらの実態は不明である。

今年度から始めた発掘調査はこれらのことを念頭に入れ実施した。

2　調査の経過

調査期間は平成18年8月28日から同年9月24日の延べ21日間である。当初、①山形県の天然記念物に指定されている大杉の西側と、②10数年前冬の大風で杉林の1本が倒れ、岩盤に掘り込んだ遺構が露出してしまった杉林区の2箇所を発掘調査する予定であった。しかし、杉の専門家から大杉周辺は広く根を張っていること（特に日当たりのよい西側の草地）や大杉自身が弱っており、発掘調査は慎重を期する意見があったので、このことを考慮し今年度は調査を見送ることとした。

平成18年度は杉林地区について重点的に調査を実施した。杉の合間をぬい、T字型の2m幅のトレンチを設定したが、いたるところに風倒木があり、それを除去するのに時間を費やした。下草や風倒木を除去すると3箇所に集石ブロック現れる。集石を残しながら表土を剥ぐが、表土というより草木の根や腐植土の層で若干土が混ざっているという状態であった。この表土を剥ぐと岩盤が顔をだした。この時点で集石ブロックが二次的な集石と判断し除去する。

その後は岩盤を傷つけないように刷毛と竹箆・移植コテを使い掘り下げていく。廃土は埋め戻しのことを考え土と岩盤破片を分別した。

調査面積は98㎡である。うち北区のトレンチは18㎡表土を剥いだだけで終了する。南区10㎡、西区18㎡は遺

第１図　国史跡延沢銀山遺跡平面図（延沢城跡）　S＝１：6,000

構の平面プラン確認で止めている。精査を実施したのは中央区52㎡の面積で完掘する。特に中央区は岩盤を削り掘り込んで遺構が築かれている。岩盤や礫類が無秩序に広がっているため、何がどうなっているのかわからない状態であった。それよりさらに５㎝ほど掘り下げると、礫類が累々と現れてきた。この段階で古い時期に整地されているのではないかと考えられた。次にこれらの礫をすべてはずし精査すると遺構のプランを確認することができた。遺構平面プランの切りあいは容易にわからず、半割し図面をとって完掘した。

次年度の調査のため完全な埋め戻しは行わず、西区・南区はブルーシートで覆い、中央区は倒木を利用して遺構全体を覆い、さらにその上にブルーシートをかけて保護した。どうしても露出してしまうところは、落ち葉をかき集めそれを遺構内に入れて、冬の凍結防止・溶解による遺構の破壊を避けた。

Ⅱ　遺跡の立地と環境

１　地理的環境

延沢城跡は山形県尾花沢市大字延沢字古城山・三ノ丸・道清沢・千貫森・堀切などに所在し、指定面積は78haに及ぶ。尾花沢市役所から直線距離にして南東方向に6.5kmの位置にある。本丸付近で標高約296ｍをはかる。本丸から北へ345ｍ、東へ200ｍとＬ字型に主要な曲輪群が形成されている。城跡の主要な部分は植林された杉林で覆われ、ブナ林が入り混じる。遺跡全体もブナ林と杉林が混在している状況である。

２　歴史的環境

延沢城が築城された時期は文献により諸説あるが16世紀後半以降17世紀以前と考えられる（改築が行われたため現況として残っている曲輪群は17世紀初頭と考えられる）。築城したのは延沢城主初代の野辺沢薩摩守満重で、能登守満延、遠江守光昌の三代にわたって居城となったといわれている。

延沢城の本丸を中心とした主要な曲輪群を回ると、周囲の北側に存在する母袋楯（落合楯）・高橋楯・行沢楯・押切楯・砂山楯・北郷楯・二藤袋楯・森岡山楯などの楯跡群を望むことができる。北西の尾花沢方面を一望でき、目前に荒楯楯跡が控えている。

また、遺跡の周辺には野辺沢氏と縁が深い龍護寺や善法寺・金城寺・円照寺、県指定天然記念物の大杉、市指定天然記念物のコウヤマキ・イヌザクラ、市指定建造物の龍護寺の山門（延沢城の大手門を移築したものと伝えられている）、室町時代の建造物と伝えられる六沢の繋沢観音堂、県指定絵画の漆書絵馬（円照寺蔵）、荒町八幡神社に奉納された紙本絵馬、三日町稲荷神社と龍護寺境内の室町期の板碑など、多くの文化財が見られる。さらに、延沢城跡下に帯状に形成された三日町・九日町は町割がなされた家並みと考えられる。

一方で、延沢城が築城する前まで居住していたと伝えられる本町には板碑群が存在し、古殿にも古屋敷という地名が残っているなど、延沢城前史を考える上では見逃せない事柄であろう。

Ⅲ　検出された遺構

先にも述べたように、北区は表土を剥いだだけ、南区と西区は遺構の平面プラン確認のみ、精査したのは中央区のみである。検出した遺構はＢＥ12基、ＳＰ17基、ＳＸ２基、ＳＤ１基の合計32基である。中央区の遺構のほとんどが地盤の岩盤を掘り込んで構築している。精査した区域の面積が52㎡と狭い面積に遺構が集中しているため、全体像が見えてこないが、現時点で考えられることを述べてみたい。

1　掘立建物跡

ＥＢ１～７・14・17・22・23・29は掘立建物跡の柱穴と考えられるが、柱穴群がどのように組み合わされるのか明確なことはいえない。これを柱穴とした理由はＥＢ２から長さ30cm、直径10cmの炭化した木柱根が出土したので、このような遺構は掘立建物跡の柱穴と判断した。ＥＢ２を精査すると木柱を埋める際、周りを青粘土で突き固めて埋め込んでいる。木柱が検出されたのはこの遺構からだけで、他からは検出されなかった。

ＥＢ２のように、まず周囲を方形に大きく浅めに掘り込んだあと、次に木柱を埋め込む柱穴を段階的に掘り込むパターンはＥＢ１・６・７・14・17に認められる。

また、ＥＢ３のように長方形に単純に掘り込むパターンも認められる。ＥＢ４・５・29がその例と考えられるが、木の根によって破壊されているので確実なところはわからない。ＥＢ22・23も南半分が風倒木で破壊されており、どちらのパターンであるかは決めかねる状況である。

柱間はＥＢ１－ＥＢ２、ＥＢ３－ＥＢ６、ＥＢ４－ＥＢ７、ＥＢ22－ＥＢ１、ＥＢ29－ＥＢ４では130cm、ＥＢ１－ＥＢ３－ＥＢ４、ＥＢ２－ＥＢ６－ＥＢ７では220cmである。

2　小　穴

ＳＰ25は長軸66cm、短軸60cmの隅丸方形気味の深さ20cmの小穴で、丸鑿痕が明瞭に残っている。底面は丸底である。ＳＰ９・10は長方形に掘られたなかに、円形の小穴が掘られたもので深さ18cmである。ＳＰ11の覆土は黒色土で炭化物を大量に含み、小穴付近及び中が被熱している。深さは11cmほどで浅い。また、ＳＰ24のように底面がフラスコ状になっている遺構も認められる。その類例としてＥＢ29やＳＸ20があげられる。

小穴とした遺構の中には柱穴も考えられるが、現段階ではどのような機能をもつ小穴であるかは不明である。

3　溝　跡

ＳＤ28は溝跡と考えられる。ＥＢ１の遺構から始まり東側に一直線に伸びる。幅20cmほどで深さはＥＢ１付近で30cm、ＳＰ31付近で28cm、ＳＰ27付近で14cm、東端で７cmとしだいに浅くなる傾向がある。

4　性格不明遺構

ＳＸ20は、平面プランが長軸164cm、短軸152cmの隅丸方形で深さ100cmをはかる。西側の底面に径40cm、深さ16cmの円形の小穴が掘られている。小穴の覆土は灰が中心で炭化物も含まれていた。

ＳＸ19は、ＳＸ20と同様な形態をもつ遺構と考えられる。底面南側に小穴がみられる。

また、ＳＸ19・20の東側にＳＰ32・ＳＰ15・ＳＰ16・ＥＢ17・ＳＰ21・ＳＰ18が南北に並ぶように、確認された。

5　西　区

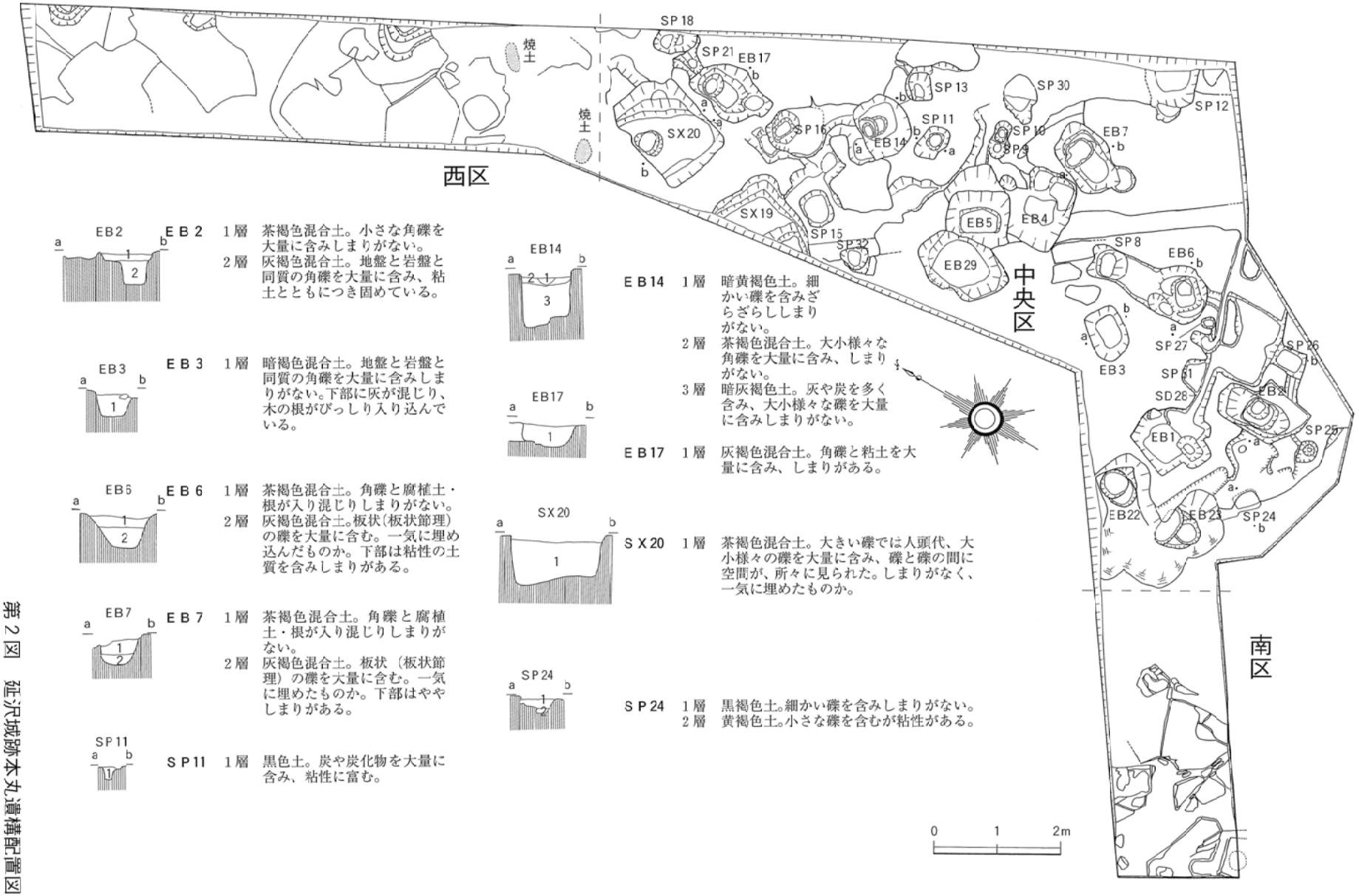
西区は遺構の平面プランを確認して終了したが、中央区と同様岩盤を掘り込んでいると考えられる。北側壁際に岩盤を掘り込んだ柱穴のような遺構を確認したが、今後の調査で明らかにしたい。平面プランからするとＳＸ19・20の性格不明遺構に類似する。

また、ＳＸ20の西側の２箇所に焼土のブロックが確認されたが、岩盤を含めこの一帯が幅広く被熱している痕跡が確認された。

6　南　区

南区も遺構の平面プランを確認して終了した。ＥＢ22・23の南側に岩盤のみられない粘土主体の地山をはさんで、岩盤主体の遺構が中央区・南区と同様に確認される。岩盤には丸鑿痕が明瞭に認められるが、小穴や掘立建物跡のような柱穴跡は認められない。岩盤全体が炭化物を含む黒色土で覆われている。

以上、ごく簡単に触れてきたが、全般的にいえることは、地盤である凝灰岩質の岩盤は風化が進み、さらに



EB2

EB２　1層　茶褐色混合土。小さな角礫を大量に含みしまりがない。
2層　灰褐色混合土。地盤と岩盤と同質の角礫を大量に含み、粘土とともにつき固めている。

EB3

EB３　1層　暗褐色混合土。地盤と岩盤と同質の角礫を大量に含みしまりがない。下部に灰が混じり、木の根がびっしり入り込んでいる。

EB6

EB６　1層　茶褐色混合土。角礫と腐植土・根が入り混じりしまりがない。
2層　灰褐色混合土。板状（板状節理）の礫を大量に含む。一気に埋め込んだものか。下部は粘性の土質を含みしまりがある。

EB7

EB７　1層　茶褐色混合土。角礫と腐植土・根が入り混じりしまりがない。
2層　灰褐色混合土。板状（板状節理）の礫を大量に含む。一気に埋めたものか。下部はややしまりがある。

SP11

SP11　1層　黒色土。炭や炭化物を大量に含み、粘性に富む。

EB14

EB14　1層　暗黄褐色土。細かい礫を含みざらざらししまりがない。
2層　茶褐色混合土。大小様々な角礫を大量に含み、しまりがない。
3層　暗灰褐色土。灰や炭を多く含み、大小様々な礫を大量に含みしまりがない。

EB17

EB17　1層　灰褐色混合土。角礫と粘土を大量に含み、しまりがある。

SX20

SX20　1層　茶褐色混合土。大きい礫では人頭代、大小様々の礫を大量に含み、礫と礫の間に空間が、所々に見られた。しまりがなく、一気に埋めたものか。

SP24

SP24　1層　黒褐色土。細かい礫を含みしまりがない。
2層　黄褐色土。小さな礫を含むが粘性がある。

第２図　延沢城跡本丸遺構配置図

風化し脆くなった岩盤の亀裂に杉や雑木の根が入り込み、遺構の破壊を進めていることで、今後も破壊は進行するであろう。

Ⅳ　出土遺物（第４図・第５図）

出土した遺物は、陶器が34点、磁器３点、碁石（玉石）４点、砥石２点、石製品２点、古銭２点、鉄製品（刀子）２点、銅製品１点、金屎１点、木柱１本である。

遺物が出土した層位は表土を剥いだ段階で出土したものが多い。遺構内出土の遺物はＥＢ１の覆土から唐津焼の皿の口縁部破片が１点、第４図の４で示した完形品の唐津焼ぐらいのもので、遺構と絡むものは少ない。遺物の分布状況をみても密度は低く、何らかの傾向をとらえることは困難である。調査区内の実線で結ばれているものは互いに接合した例で、破線で示したものは同一個体であるが接合しない例である（第３図）。

１　陶 磁 器

１は、推定口径28.3cmの擂鉢破片である。別々に出土したのが接合した。色調は茶褐色で釉薬はかけられていない。２は口径7.6cmの小鉢である。底部は回転糸切りで炭化物の付着が見られる。３は推定口径13.3cmの皿で、同一個体と思われる破片が５片出土し、うち２片は接合した。口唇部に特徴があり、いわゆる溝縁皿といわれるものである。

４はＥＢ１及びＥＢ２の近くから伏せた状態で出土した完形品の唐津焼の皿である。口径10.8cm、底径3.5cm、器高3.6cmを測り、高台は削り高台。見込みに３箇所の砂目のあとが付いている。この皿に顕著にみられるのは、口唇部に炭化物が付着していることである。出土状況を丁寧にみていくと、皿が出土した場所は周りの岩盤を半円状に10cmほど掘り込んで、さらに皿を取り囲むように５～６個の小穴が掘られている。遺構の性格や皿の機能を考える上で注意したい事実である。

５は推定口径12.6cm、器高3.5cmの皿である。見込みに２箇所の砂目の痕がみられる。高台は削り高台で砂がびっしりと付着している。溝縁皿の仲間と考えられる。

６は推定口径12cm、器高3.2cmの皿である。内面に段があり高台は削り高台である。

これらのほか、図化しなかったが染付けの小破片が３点出土し、薄手の上手ものである。写真ではわかりにくいが、２点は高台の高さが0.2～0.4cmと低い中皿と考えられる。もう１点は厚さが0.2cmにもみたない薄手のもので、器形は向付のようなものと考えられる。

２　鉄製品・金屎・古銭

７は鉱石を溶かしたときに出た屑、いわゆる金屎と考えられる。１点出土したが、周辺の遺構を考える上で注意したい遺物である。

８は現存長4.6cm、幅１cmの鉄製刀子と考えられる。刃部先と基部を欠いている。９も８と同様な鉄製刀子と考えられ、現存長3.1cm、幅1.2cmをはかる。刃部先と基部を欠いている。

10は景徳元寶（1004年）、11は熙寧元寶（1068年）でいずれも北宋銭で１点ずつ出土している。これらのほか銅製の非常に薄い板状の製品が出土している。

３　石製品・砥石・碁石

12はEB22南側の風倒木で撹乱された中から出土した。現存長20cm、幅16cm、厚さ8.5cm、約３分の１が欠損する。長方形に荒割りした軟らかく粗めの砂岩質の石材で、中を平鑿でU字形に削り取っている。内部は黒く焼けている。

13は何であるか判断できないが、大胆に推測すると全体が方形を呈し、４本の脚が付いた手水石のようなものではないかと考えられる。脚は平鑿で丁寧に成形された痕跡が残っている。

14は長さ12.6cm、幅５cm、厚さ４cmの目の細かい砂岩質の砥石である。側面にも砥面がある。

15も長さ10.3cm、幅４cm、厚さ３cmのやはり目の細かい砂岩質の砥石である。砥面が６面あり全面が砥石として使われている。図面の上部にU字型の溝が２本平行に刻まれている。

16～19は碁石と考えられる。形態は楕円形を呈し、長径1.7～2.4cm、短径1.4～2.2cm、厚さ0.6～1.3cmで、18は、灰褐色の石英質の石材で、ほかは黒色の石材である。

Ⅴ　ま　と　め

１　遺構について

平成18年度は延沢城跡の本丸東側を調査したが、杉林の中で木々の間をぬってという制限もあり、遺構の性格を明確にするまでにはいたらなかった。ここでは、調査事実を列記して今後の調査分析の課題としたい。

⑴　中央区で確認された遺構は32基で、その内容は掘立建物跡の柱穴、小穴、溝跡、性格不明遺構である。これらの遺構はほとんどが地盤である岩盤を掘り込んで構築されている。西区・南区を含め、岩盤が黒く焼けている箇所が多く認められる。西区には焼土も認められる。また、遺構の覆土を観察すると自然に埋没したのではなく、人為的に埋められている。

⑵　遺構の配置をみると遺構相互の関係について解釈に無理が出てくるので、検出された遺構が同一時期とは考えにくく、時間差があるため遺構は重複していると考えられる。

⑶　岩盤の遺構の構築に丸鑿と平鑿の両方が見られ、丸鑿が多用されているがその違いは何か。時期差や使い分けがあるのか。

⑷　遺構が焼けている部分があると同時に、炭化物が付着している唐津焼が６点、被熱による破損の唐津焼が１点出土するが、何を意味しているのか。

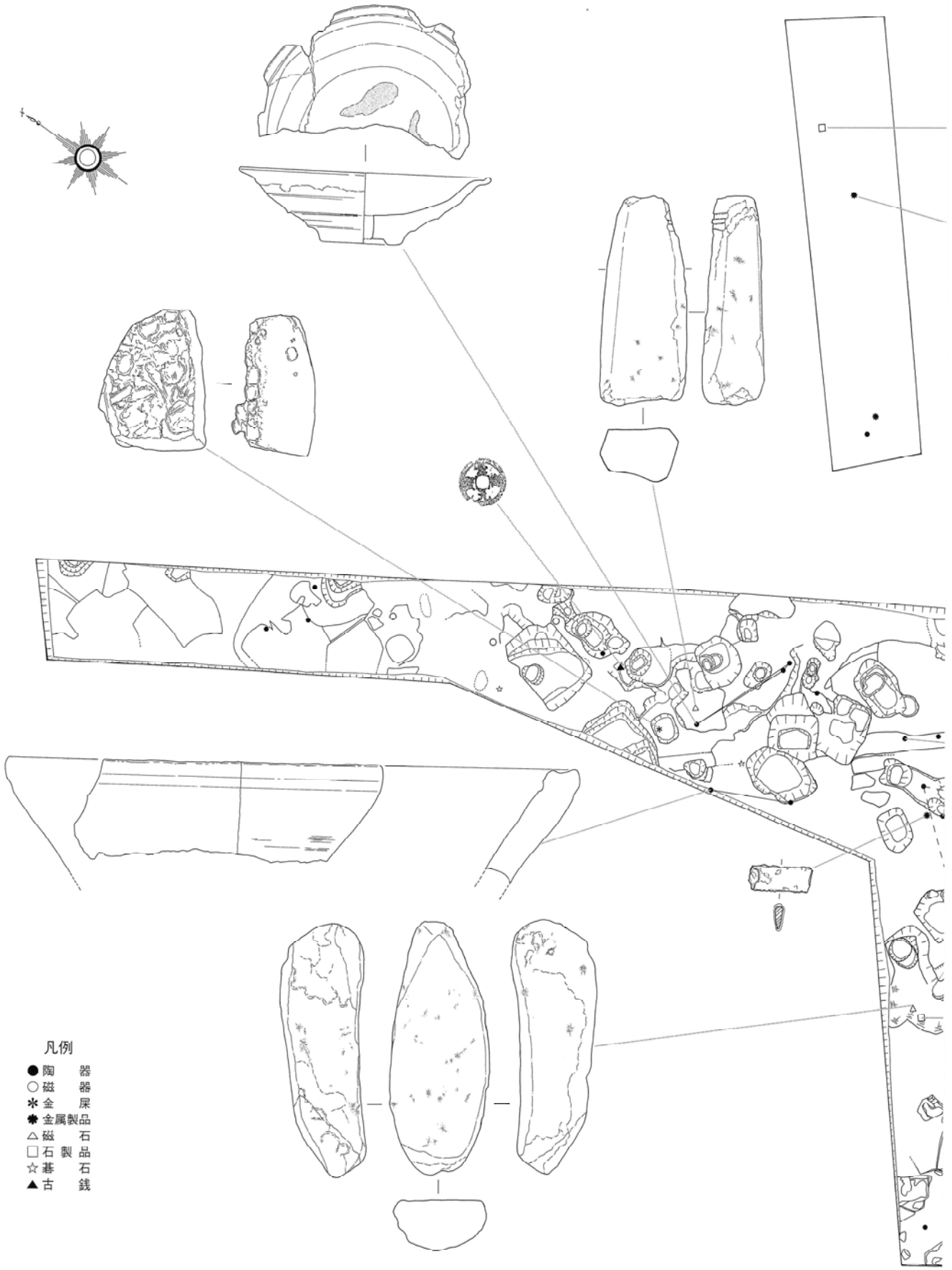
⑸　金屎は製鉄に関連する遺物であることからどのように解釈するのか。

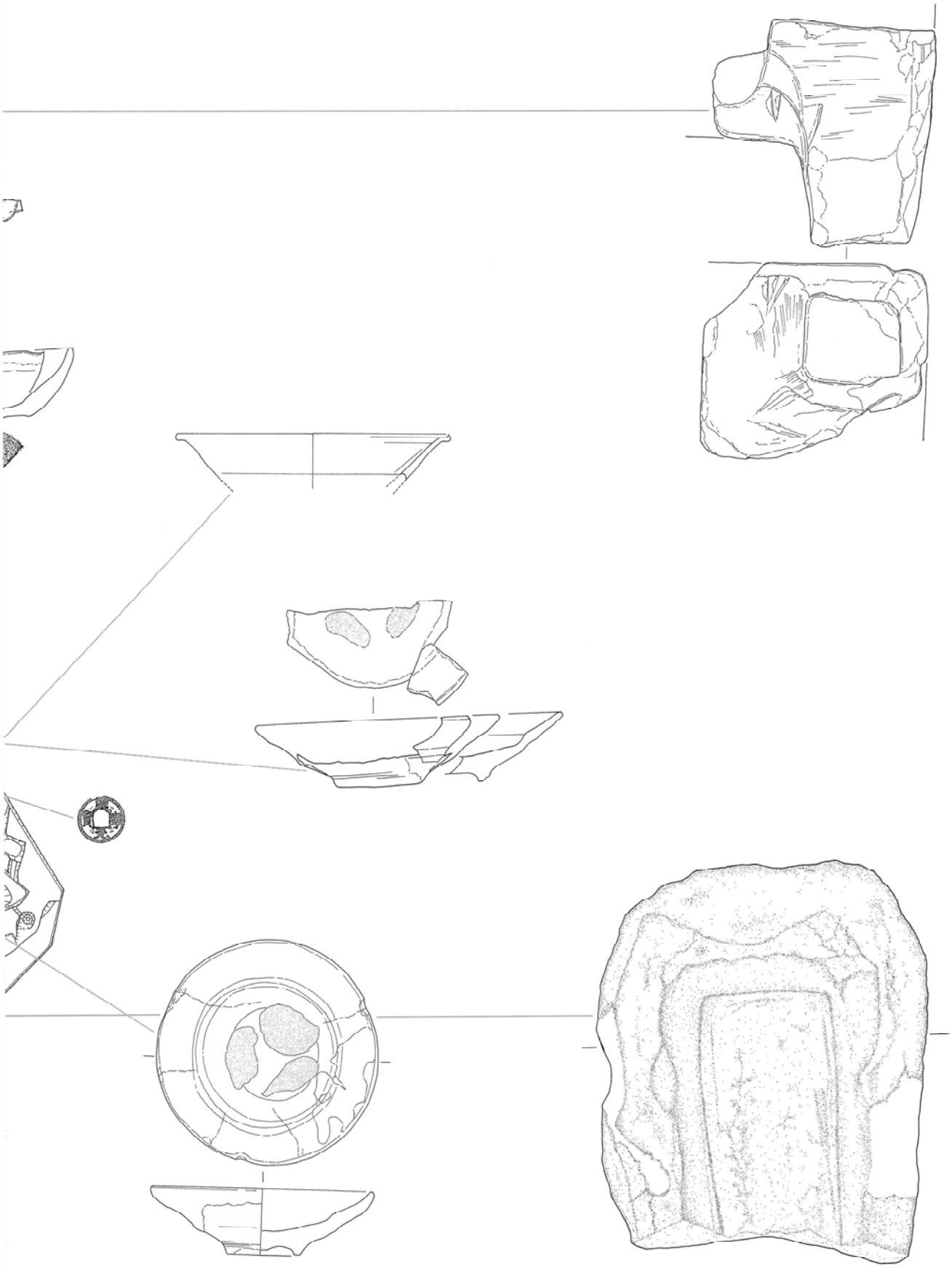
⑹　唐津焼の特徴をみると、溝縁皿が見られることから、その時期は1600年代～1620年代と考えられる。

今後、発掘調査を進めるにあたりこれらのことを念頭に入れ、さらに情報収集や整理分析を進め遺構や遺物の理解をしていかねばならない。

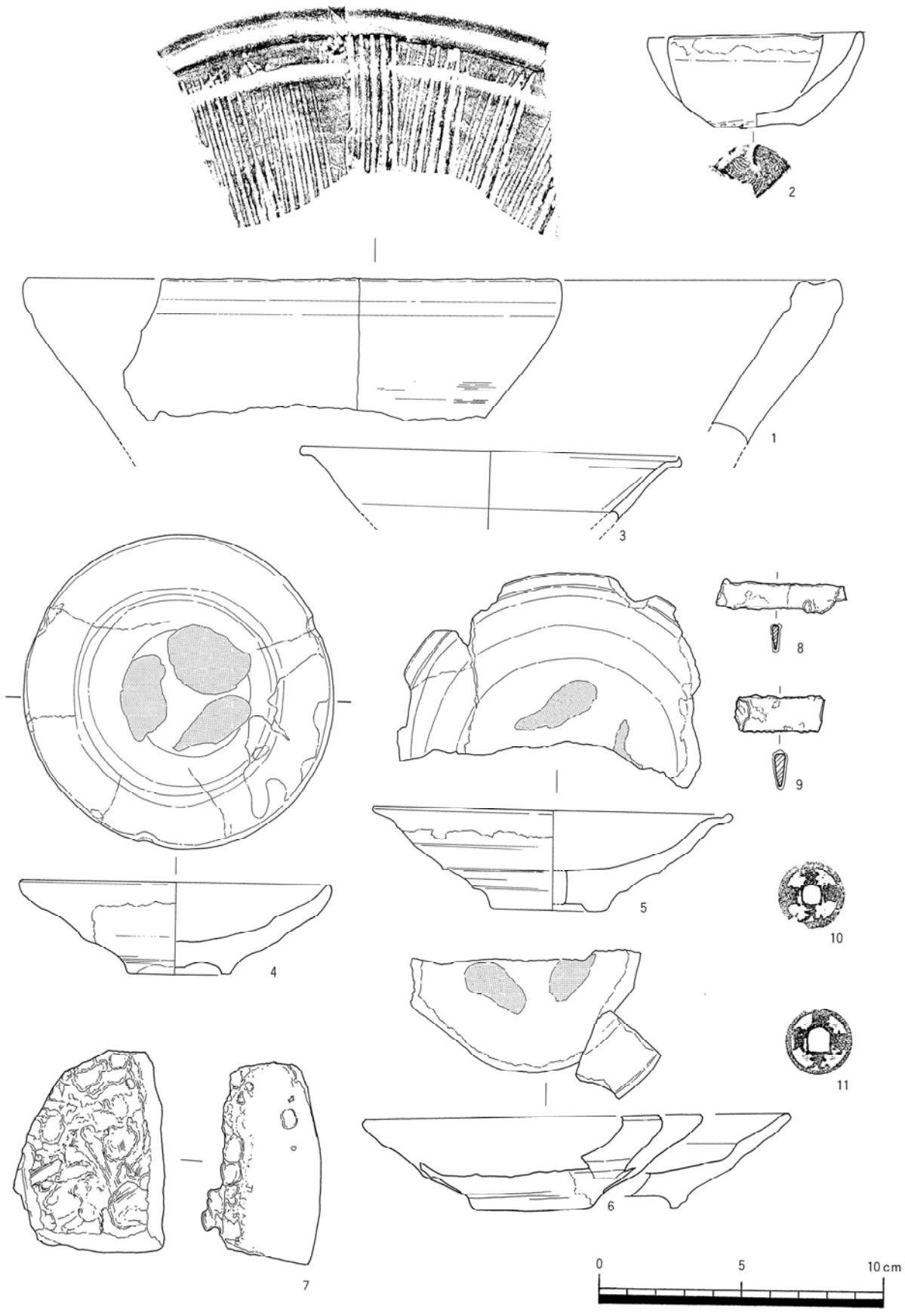
参考文献

1978　読売新聞社　『やきものの源流を訪ねて「大唐津展」』
1989　尾花沢市教育委員会　『史跡延沢銀山遺跡保存管理計画書』
1992　山形県教育委員会　『藤島城跡発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財報告書第181集
1999　㈶山形県埋蔵文化財センター　『米沢城発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財センター報告書第66集
2001　㈶山形県埋蔵文化財センター　『白鳥城跡発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財センター報告書第85集
2001　平凡社　別冊太陽『古唐津』
2004　財団法人出光美術館　『古唐津』

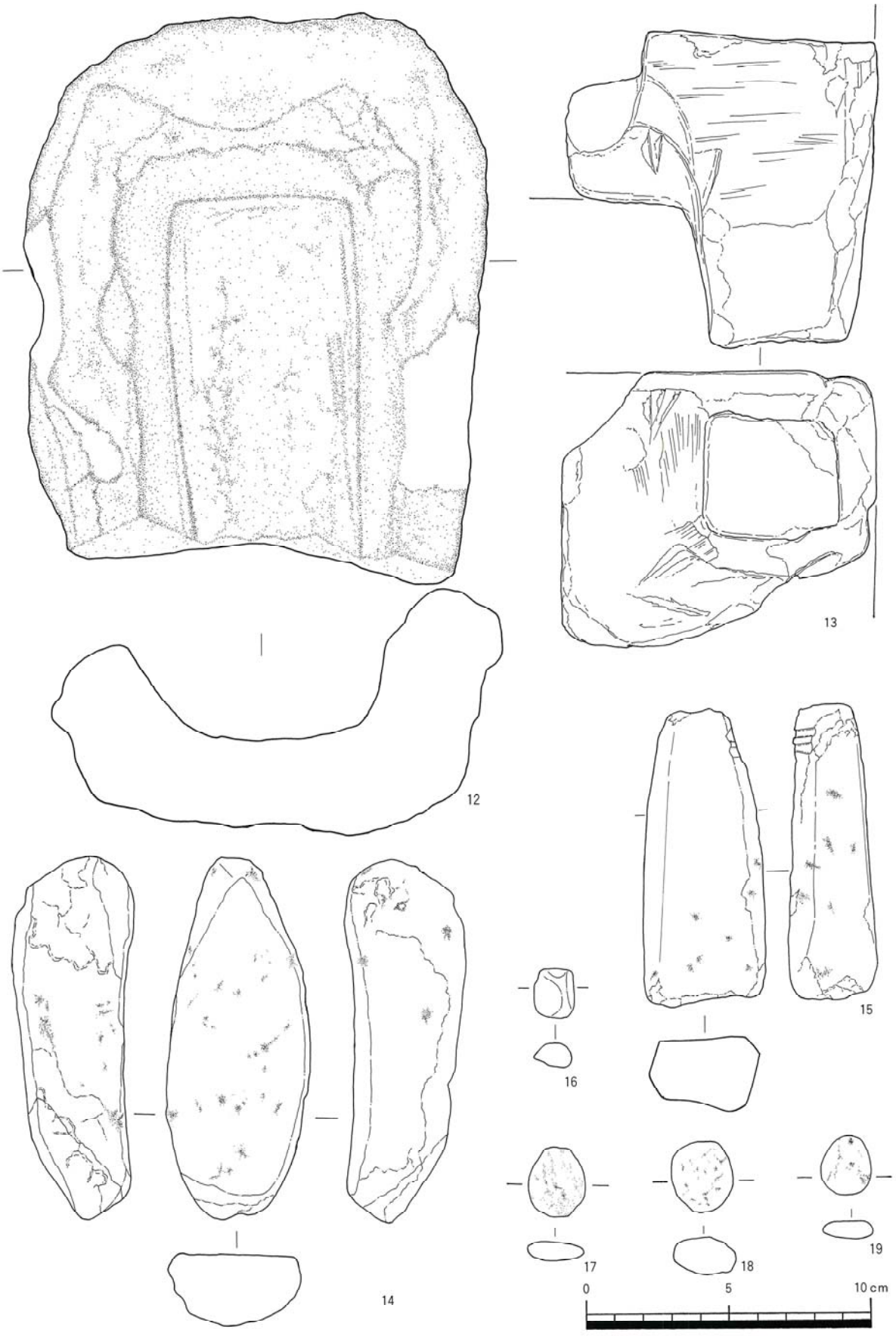

凡例
●陶　器
○磁　器
✻金　屎
✸金属製品
△磁　石
□石製品
☆碁　石
▲古　銭



第３図　遺物の分布状況図

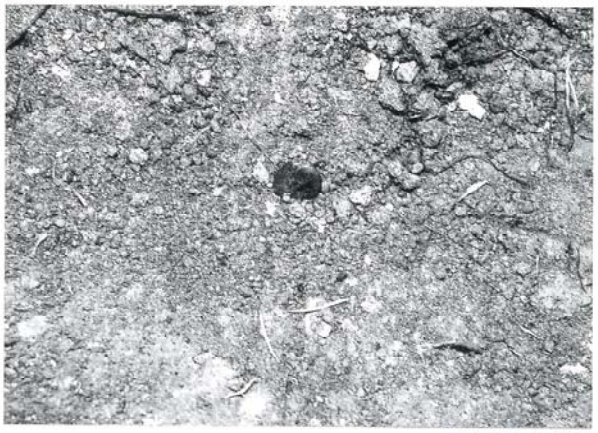


第４図　遺物実測図（１）



第５図　遺物実測図（２）

▲唐津焼出土状況



▲碁石出土状況

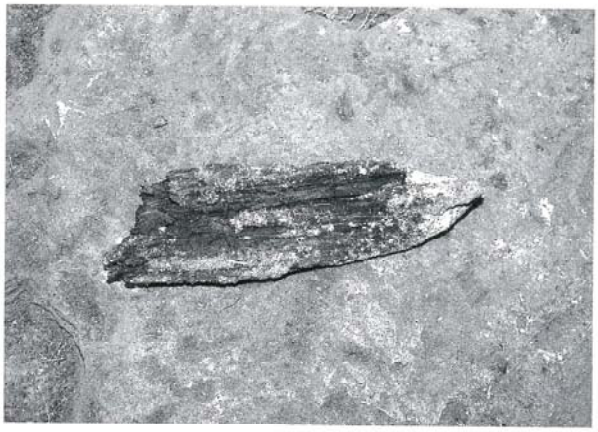
▲唐津焼出土状況

▲鉄製品（刀子）出土状況

▲唐津焼出土状況

▲古銭出土状況

▲唐津焼出土状況

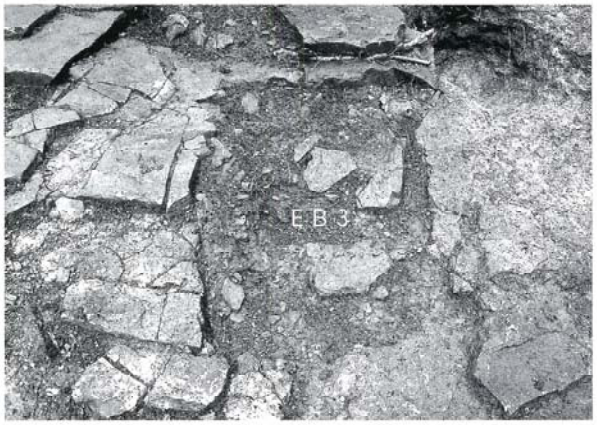


▲木柱（ＥＢ２より出土）

▲遺構検出状況（中央区）

▲南区の検出状況

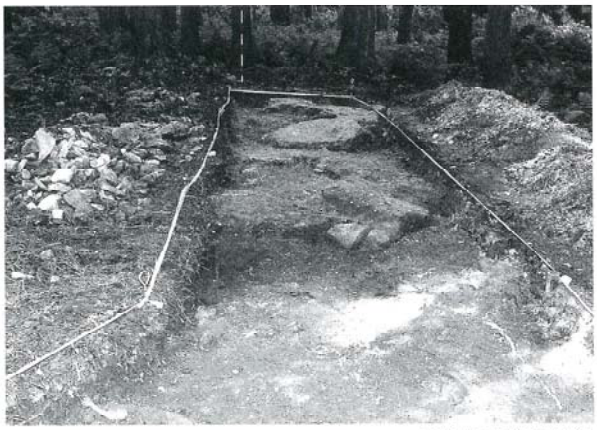
▲遺構検出状況（中央区）



▲ＥＢ３のプラン確認状況

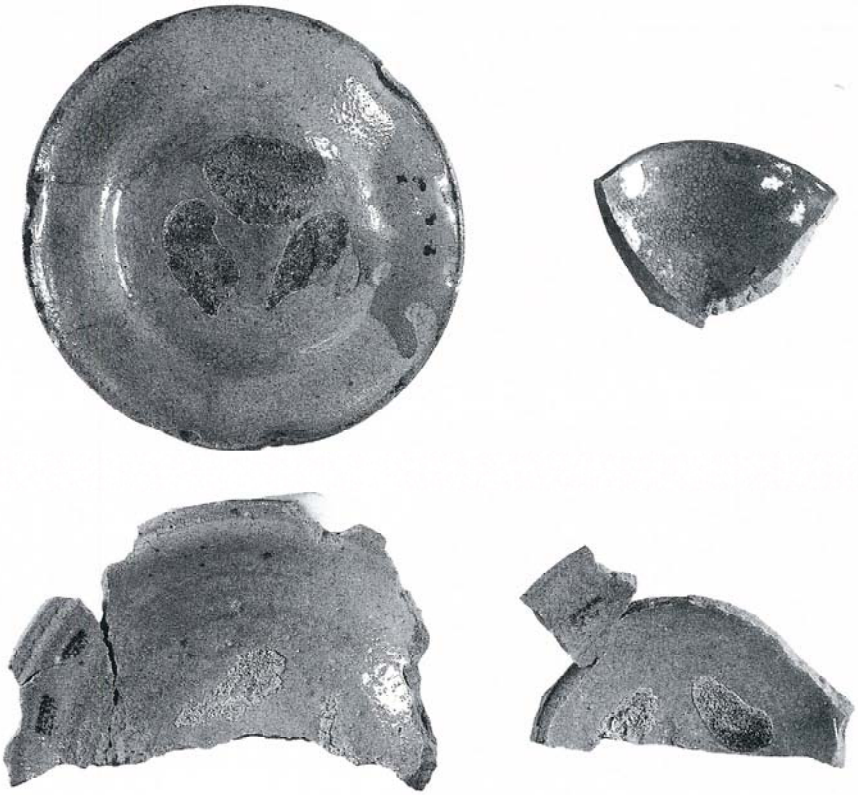
▲ＳＸ19・20周辺

▲ＥＢ７のプラン確認状況



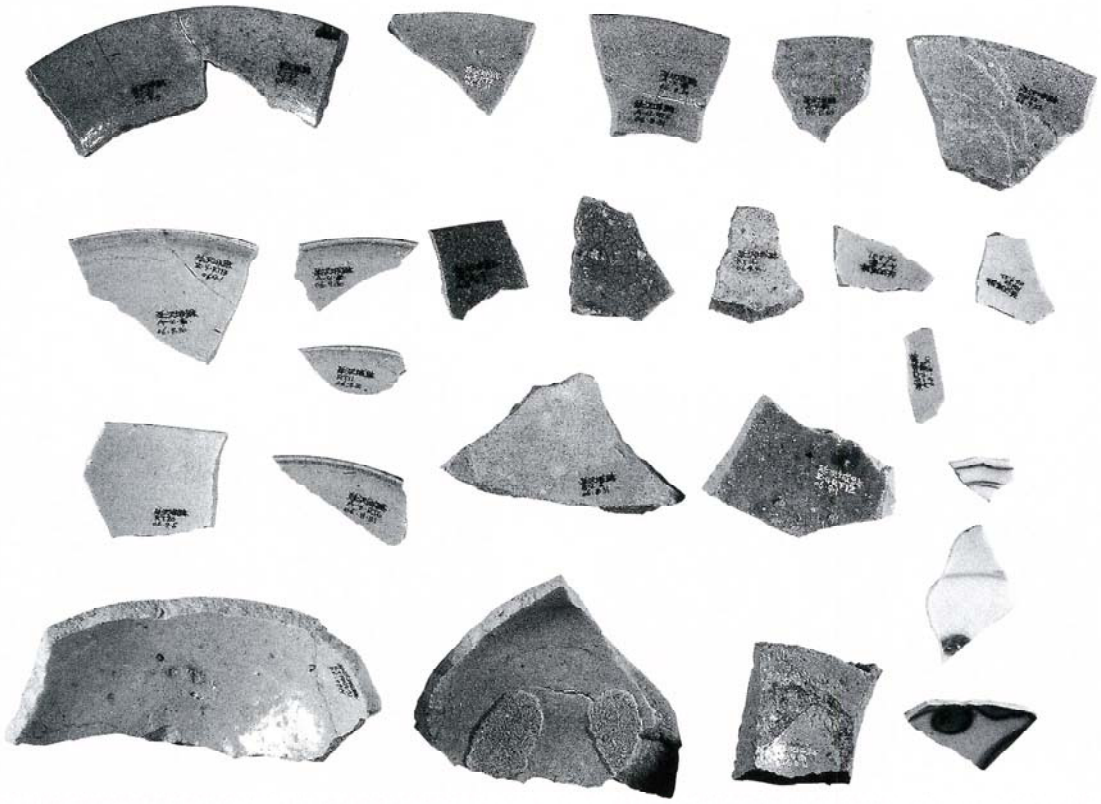
▲西区の検出状況

▲ＥＢ７の完掘状況

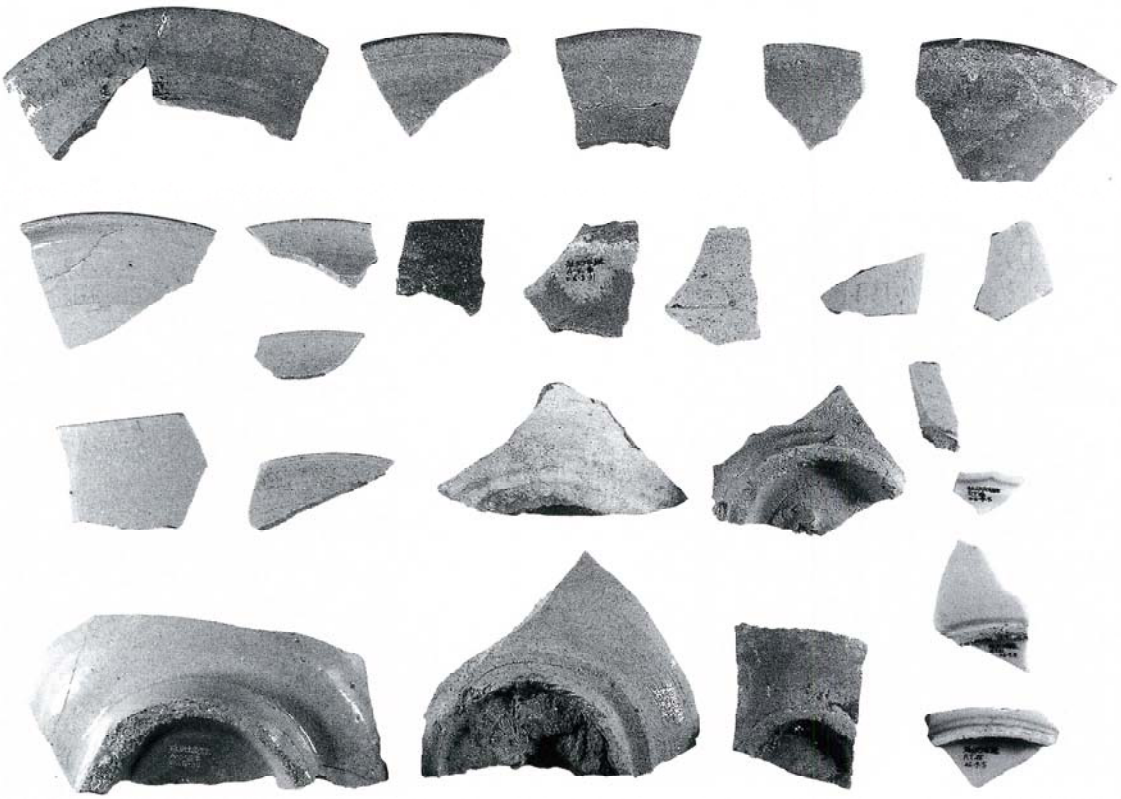


唐津焼（内面）

唐津焼（外面）



唐津焼・伊万里焼（内面）

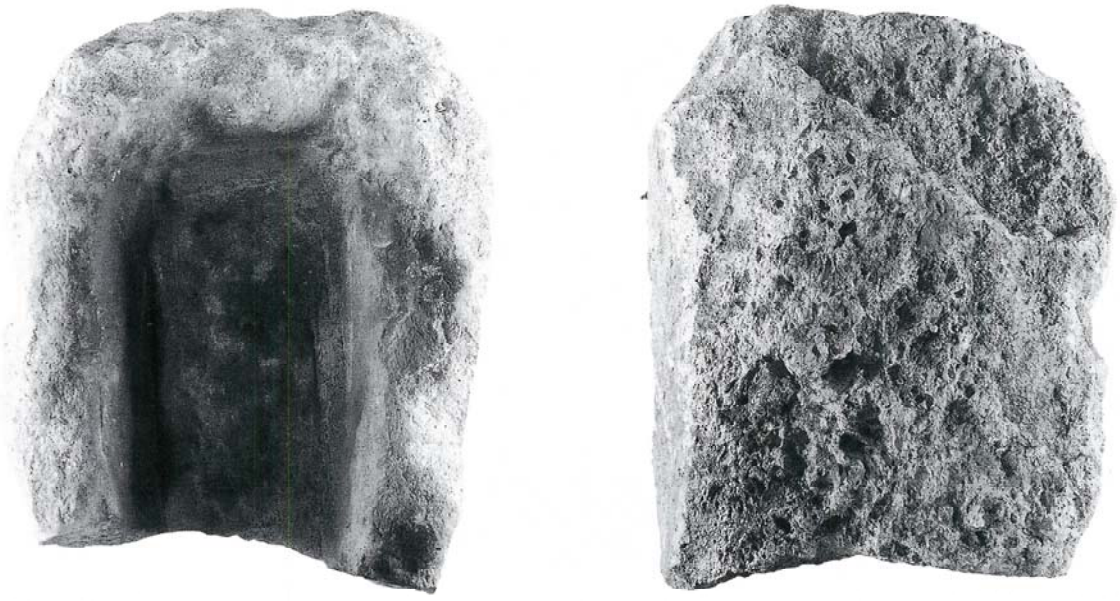


唐津焼・伊万里焼（外面）

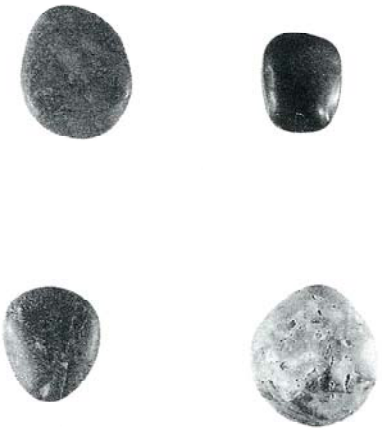
擂鉢（内）

擂鉢（外）

石製品・砥石



石製品



碁石

金屎・刀子・古銭

山形県尾花沢市埋蔵文化財調査報告書第６集

延沢城跡発掘調査報告書

－ 第１次調査 －

編集・発行：尾花沢市教育委員会
山形県尾花沢市若葉町一丁目４番27号
TEL　0237－22－1111㈹

印　　刷：大場印刷株式会社
山形県山形市立谷川二丁目485－２
TEL　023－686－6155㈹